

生徒の総合的な 学び支援体制

ASAHIKAWA RYUKOKU HIGH SCHOOL
SKYLIGHT PLAN



SKYLIGHT PLAN

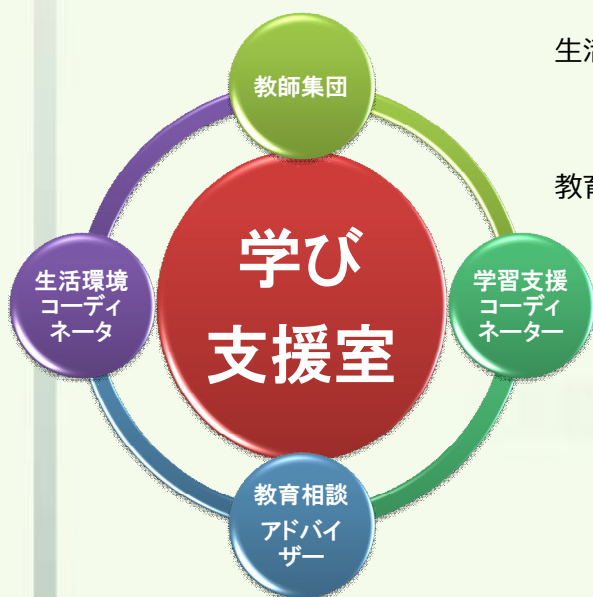
SKYLIGHT:天井光
全ての生徒に天窓からの「光」が差し込む、の意味

安心して思いっきり学べる学校

本校は、開校以来「面倒見の良さ」を掲げ、生徒が安心して思いっきり学べる学校づくりを進めてまいりました。平成23年度からは、昨今の生徒が抱える様々な問題や「つまづき」などに対応できるよう専任スタッフを常勤配置、「見立て」、「手立て」を複数教師とチームとして支援に当たる「学び支援室」を開設しました。

スタッフには、経験豊かな教師二人を、学習支援、生活環境の両コーディネーターとして任用、これに教育相談アドバイザーを加えた総合的な学び支援体制の確立を目指しています。

学び支援室とスタッフ



○室 長 (校長兼務)
小野寺 敏光

○スタッフ
学習支援コーディネーター
Suzuki Tetsuro
鈴木 徹郎

(3階 学び支援室)

生活環境コーディネーター
Takayanagi Tomoki
高柳 知己

(3階 学び支援室)

教育相談アドバイザー
Kaizu Hajime
貝 津 肇

(1階 教育相談室)

つまずいても だいじょうぶ

stumble and learn



背景と概略

ラベリング全盛時代の中で

「小1プロブレム」・「中1ギャップ」・「高1クライシス」というラベリング（名称化）が定着されて久しい。いずれも、各学校入学後の生活環境面、学習面、人間関係面にうまく適応するのが困難となり、問題行動を起したり、不登校状態に陥る児童生徒、中途退学に至る高校生たちの要因や状況を指します。

こうしたラベリングは事象を極めて単純化させる弊害があります。それは、この状況解決への個々のより深い原因究明や対策に「光」を当てることなく、表面的なマニュアル対応に陥りやすいからです。

問題や「つまずき」はだれでもが持つ

高校の勉強が理解できない、教師・友人とのコミュニケーションがうまくいかない、家庭生活でトラブルが起きた、精神面で深刻な悩みを抱えてしまったなど、生徒は入学後から様々な「つまずき」を抱え始めます。

本校の〈スカイライトプラン「学び支援（室）体制」構想〉は、まさにこうした「つまずき」を抱える生徒個々に「光」をあて、より良い解決への「見立て」をし、それを教師全体で支援していくことを目標にしています。

「面倒見の良さ」のファーストステップは「見立て」から

◆「コーディネータ」体制～常勤スタッフ

生徒の様々な「つまずき」「悩み事」に対応するのは、教育経験豊富な2人のコーディネーターと常勤の教育相談アドバイザーの3人です。こうした初期対応により、生徒の「つまずき」の分析「見立て」、そして軽減するための「手立て」が検討されます。

「面倒見の良さ」のセカンドステップは「手立て」を

◆「手立て」を実践する～複数教師のチーム支援環境が必須

「つまずき」を持つ生徒対応に、クラス担任や特定教師が一人で当たるケースはよくあります。しかし、対応にあたっての分析、判断、対処に時間・心身の負担が過重になり、期待する結果が生まれにくいことにもなります。本校の構想では、これを避けるため、「見立て」情報の共有を図り、チームで「手立て」を実践していきます。

～ 学び支援 その1 ～

H23年度基礎学力向上「学習会」

年間実施計画

- ねらい：各教科の教育効果を高めるため、義務教育段階での学習内容の定着を図る学習機会の設定
- 教科：国語・数学
- 対象：第1学年生徒若干名
- 実施日：放課後～毎月曜日15：45～16：30
夏・冬期休業～それぞれ3日間（3時間/日）

実施延べ日数

～33日

実施時数

～45時間

